

## 片山廣子短歌研究

著者	清水 麻利子
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	文学
報告番号	32663甲第465号
学位授与年月日	2020-03-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00011981/">http://id.nii.ac.jp/1060/00011981/</a>



二〇一九年度

東洋大学審査学位論文の要旨

# 片山廣子短歌研究

文学研究科日本文学文化専攻博士後期課程

学籍番号4140140002

清水麻利子

『心の花』の歌人片山廣子の、内面を凝視した今も色褪せない感性を持つ短歌は、短歌史の中での検証が少ないために、十分に評価をされてこなかった。本論文は、新派の発生から自然主義を経て戦後短歌に至る歌壇の潮流の中で、アララギ派や前田夕暮など同時代の歌人と対比し、「われ」を詠む片山廣子短歌の独自性の究明を目的として、廣子短歌の全貌を把握しようとしたものである。

また、芥川龍之介に「才力の上にも格闘出来る女」と敬慕され、芥川の最後の恋人「越びと」として関心を集めた。片山廣子は、当時の封建的社会制度の中で煩悶しながらも、歌人としてアイルランド文学翻訳家として活躍をする。近年、その清廉な生き方と深みのある短歌や随筆が注目され、古谷智子『片山廣子―思ひいづれば胸もゆるかな』（本阿弥書店 二〇一八年）の評伝にも纏められている。本論文では、短歌やアイルランド文学を巡っての片山廣子と芥川との交流や、互いの受容という点を深く追及し、これらが廣子短歌に与えた影響を考察した。

更に、翻訳から短歌作品への反映を考察した。廣子は素朴で人間味溢れるアイルランド文学の翻訳で、森鷗外や上田敏らから高い評価を受け、浪漫的で思索的だった第一歌集『翡翠』の歌風は、平明な生活詠の歌風へと変容する。西洋的な視点と、佐佐木信綱の指導を受けた万葉集の素養と豊かな表現に依り、晩年の歌集『野に住みて』は新境地を拓く。翻訳については原文や再翻訳、他者の翻訳との対比から変化の過程を確認し、中断したと言われた時期のシング作品の再翻訳や雑誌掲載の新たな翻訳の発見があった。研究に際し、廣子の歌集・随筆・翻訳・小説・書簡及び、廣子に言及した周辺資料を調査分析した。富山市高志の国文学館所蔵「芥川龍之介宛片山廣子書簡」二、鈴鹿市佐佐木信綱記念館所蔵「佐佐木信綱宛片山廣子書簡」、東洋英和女学院所蔵「片山廣子氏寄贈本」等、貴重な資料を現地にて閲覧させていただき、許可を得て本論文の作成となった。

本論文十章の考察を通して、『翡翠』から『野に住みて』へ、二冊の歌集の大きな変化が指摘できる。(1)生活者としての体験からの人間的成長 (2)翻訳家として身に付けた伝わりやすい表現 (3)現実的な生きた言葉の世界から即興詩をつくり出す、アイルランド民謡からの影響 (4)生き方を模索する幅広い読書姿勢。これらにより、「我が世にもつくづくあきぬ海賊の船など来たれ胸さわがしに」(『翡翠』)の、「われ」を詠む夢想的な歌は、「二つの夢みたされて眠る人の如くけふの入日のしづかなる色」(『野に住みて』)の、晩年の「老境の文学」ともいえる、象徴性を含んだ平明な生活詠に変化してゆく。

片山廣子短歌は、旧派和歌の伝統を引き継ぐ明治時代に始まり、戦後短歌に至る。同時代の文学者や歌人達との交流の中で様々なものを取り入れ、激動の時代と共に変化を遂げて行ったが、一貫して、片山廣子短歌の独自性は、深い精神性を湛えた「われ」を詠む短歌であった。時を重ねて、アイルランド文学翻訳家（筆名、松村みね子）としての近代日本を先駆けた仕事や、文学的伴侶の芥川が名付けた「越びと」としての矜持が、「われ」の歌の厚みを増していったと考えるものである。

\*『片山廣子短歌研究 芥川龍之介との「うた」の道行』（角川書店 二〇一九・九）を刊行。これとは別に、本論文は、第六章に新資料を研究した付論「村岡花子宛片山廣子書簡（東洋英和女学院所蔵）からの考察」を加え、全体的に標題、論考、表現を改めた。

**第一章「片山廣子の短歌と芥川龍之介 芥川への書簡と歌稿に込めた再生への祈り」**では、富山市高志の国文学館所蔵「芥川龍之介宛片山廣子書簡」の、書簡十四通と歌稿「追分のみち」に於ける、廣子の心情と短歌作品への反映を分析した。アイルランド文学の翻訳に情熱を傾けることが、こうありたいと願う自身の内面と向き合うことになったように、「みづからのためにしも生くる」思いが、芥川へも向かったと考えた。そして、短歌は新境地を見出してゆく。芥川へのこれらの書簡・短歌からは、廣子が芥川に、自らの再生への祈りを込めた思いが判断できた。

**第二章「大伴家持を詠む片山廣子短歌の考察 芥川龍之介宛書簡の短歌から繋がる歌心」**においては、廣子短歌に於ける万葉集受容を探究した。佐佐木信綱の指導を受け、万葉集の表現を身に付け、晩年の歌集『野に住みて』に実を結ぶ。「ひばりの歌」（『心の花』昭和二十二年六月）十二首の短歌は、大伴家持の歌を読み、自らも詠んだ連作である。大伴家持の歌からは繊細な「物はかない気持」を我がものとし、「ひばりの歌」には自身の人生を重ねて詠んだことが、「われ」を表象する近代短歌として評価できる。更に、虚無的な気質と多くの死別を経験した廣子の孤独と憂鬱や、芥川宛書簡の短歌と重なる陰影を持つ歌心が反映していることが分かった。

**第三章「片山廣子の短歌『いさゝ川』から『心の花』へ 初期歌風の形成を巡って」**では、従来研究されていない、『いさゝ川』掲載の初期の短歌作品に焦点を据え、旧派の歌風から近代の歌風への移行の過程を考察した。多様な題材と表現が混在しているが、後に『翡翠』の歌風から『野に住みて』へと変容してゆく、平易な詞と身近な素材で共感を得る、廣子の「われ」の歌の世界の出発点がここにあると考える。『翡翠』の感性や知性の観念性が読者にとって理解しがたく、「われ」を詠む清新な歌集として読まれなかった。内面世界を詠んだ、『あけぼの』『玉琴』の初期の歌が入っていれば、評価が変わっていたと言える。

**第四章「佐佐木信綱と片山廣子 廣子の信綱宛書簡と『心の花』歌稿を巡って」**では、二人の師弟関係を考察した。信綱の業績を残す鈴鹿市佐佐木信綱記念館所蔵の、六点の資料から、信綱との関わりの中で廣子が「われ」と対峙し、清新な歌を詠んだ歌人としての姿勢が見えてきた。翻弄される時代と境遇ではあったが、アイルランド文学の特色である夢想の物語世界や虐げられた人々の思いを翻訳した先駆者であった。「歌人もひろく視野を広げねば」と考える信綱との師弟関係が廣子の歌も夢をも育てたことが分かる。

**第五章「片山廣子の短歌とアイルランド文学 遠きわたつみを夢見た「越び」と芥川龍之介」**の章では、再翻訳や、雑誌掲載の新たな翻訳の発見があり、翻訳から短歌作品への反映を考察した。「明るくワイルドな文芸」に感興をそそられて始めたアイルランド文学翻訳について、原文や再翻訳、他者の翻訳との対比から、その変化の過程が確認で

きた。翻訳の蓄積の過程により、口語のリズムと生き生きとした平易な表現を身に付け、人間味豊かな市井の登場人物たちと出会って、洞察力を深めた。短歌にも変革をもたらした、『野に住みて』の軽やかで深みのある生活詠へと歌風は変化する。翻訳の中断は、新たな翻訳の発見があり、従来の説の芥川の死の直後ではなく、昭和五年十一月に堀辰雄が芥川と廣子と娘の總子モデルにした「聖家族」が発表されて以降であると考える。

この後に、「資料 片山廣子（松村みね子） 翻訳年譜」を記載した。

**第六章 「東洋英和女学院への片山廣子寄贈本から見えてくるもの」**の章では、片山廣子寄贈本百十四冊から、廣子の読書傾向と教養や交流の経過を考察した。寄贈された本の著者毎に、寄贈本を巡っての廣子の文学的意識の有様と深まりを分析していった。寄贈本の中で、廣子宛に献じられた本からは、芥川龍之介、堀辰雄、与謝野晶子、佐佐木信綱らとの交流関係が見えてくる。また、寄贈本から推察できる大切な点は、廣子の読書姿勢である。文学的なものばかりでなく、内面世界を深めるために進むべき方向を模索する読書姿勢が見えてきた。日本の古典から外国のものへ、好みのものから相対するものへ、幅広い読書を心掛ける。また、寄贈本から、表現面では初期から、写生、写実に関心を持つていたことが分かった。個性を尊重し、「広く、深く、おのがじしに」を標榜する『心の花』の歌風に加え、廣子は、良寛、老子の囚われない精神世界に心惹かれている。群れることを嫌い、曠野に住むことに憧れ、ありのままの自分でいられる自然体を貫いた歌人と言える。良寛の歌の特徴として一に枕詞の多さ、二に三句切れの歌の多さ、三に倒置法の多用、四と五は、接統助詞「つつ」と、助詞「の」の多用による音調美があるが、廣子の歌にも同じ特徴が見られた。

「資料（片山廣子氏寄贈本）東洋英和女学院史料室だよりNo.67」を記載。

付論「村岡花子宛片山廣子書簡（東洋英和女学院所蔵）からの考察」を加えた。付論の新資料から、後に『赤毛のアン』の翻訳をする後輩の村岡花子に対し、新しい時代を生きる女性を育てるためとして、協力を惜しまなかったことが分かる。

第七章、第八章、第九章では、第一歌集『翡翠』と第二歌集『野に住みて』を中心に、多用した題材やキーワードを詠み込むものに分けて短歌を分析し、片山廣子短歌研究を展開した。考察に当たり、随筆、書簡、訳書あとがき、歌集評、その他を参考にした。

**第七章 「片山廣子短歌研究 われー生くる我とゆめみる我と」**では、廣子の生涯の精神世界を表象した「われ」を詠む短歌ではあるが、夢想で形づくる世界から、生活の中の実感から生まれる表現へと、同じ題材であっても歌風の大きな変化が確認できた。

**第八章 「片山廣子短歌研究 家族ー花のごとく木草の如く」**は、一、父・母 二、夫 三、子の順で採り上げ、家族詠に廣子の人格的な成長が見られた。アイランド文学の翻訳を通して人への洞察力が深く鍛えられ、題材の捉え方や表現に変化が生まれたと言える。

**第九章 「片山廣子短歌研究 死生観ーおもひのままに生きて死なばや」**で考察した歌は、廣子の中の死生観や、戦争への批判精神や価値観など、二歌集を通して揺らがない芯になるものがあり、大きくは変化をしていない。生涯を通して「おもひのままに生きて死なばや」の「われ」を、心中大切に詠むことができたモチーフだったと言える。そ

して、自分の表現を模索し続け、「よき歌の一つを欲しく」と、最後まで願っていた。

**第十章 「芥川龍之介・片山廣子短歌の創作と交流」**においては、まず、これまで研究の少ない芥川龍之介の短歌について考察をした。芥川研究としても意義があり、短歌史の中での片山廣子短歌の独自性を究明することにも繋がると思ったからである。芥川の短歌は、浪漫の域を出ない間は独自性が感じられず、模倣に思える。しかし、生活を詠んだものや、正反対に象徴的なものには、写生・写実の具体の説得力に並ぶものを感じられるのが特色である。芥川龍之介が厳しい作家活動の中で、模倣と言われながらも短歌を詠み続けたのはなぜだったのか。①心の吐露や癒やしの役目 ②心と言葉を盛る器として、抒情性の涵養と言語表現の修練 ③形式と韻律の追究 ④純粋な短編小説への模索。以上の四つがあげられる。短歌が小説に大きな影響を与えたとは言えないが、折々に芥川龍之介の文学活動に深く関与したことを確認した。また、芥川が短歌・歌論を通して、大正歌壇に向き合ったことは、小説家として鍛錬の場となった。芥川は、優れた歌人たちと出会い、批評にも筆を執り、感性と言語表現の感覚を磨くことで小説に活かす。では、短歌と小説との関わりはどうか。芥川の作品の魅力に、抒情性がある。短歌は、心の吐露や癒やしの役目を果たしたと共に、抒情性の涵養と言語表現の修練となり、短歌と小説を繋いでいたと考えられる。

次に、強く惹かれあった芥川との交流が、廣子の短歌に与えた影響を考えた。芥川龍之介と片山廣子は、小説家と翻訳家としてそれぞれに活躍し、「うたの道」を歩む。互いに短歌を詠み、芥川の「越び」と廣子の「日中」は相聞歌であろう。大正歌壇においての、古典の香り高い創作と交流であり、芥川が「詩的精神」と言った芸術的な純粋さを追究した時、廣子と重なったのが、「うたの道」であったと言える。

この後に、「資料 片山廣子（松村みね子）略年譜」を記載した。

佐佐木信綱の指導を受ける廣子は、写生詠をはじめ多様な歌風に興味を持っていたことが、第六章で考察をした東洋英和女学院へ寄贈された蔵書から分かった。廣子の歌風が思索的な心象詠から、晩年の自然体を感じさせる生活詠へと変化してゆく上で、「おのがじしに」の信綱の考えやこれらの蔵書からの影響が考えられる。

短歌・翻訳に時代の先駆者として駆け抜け、長い空白の時を経て、晩年、再びの情熱をもって仕事に打ち込んだ片山廣子。考察を深めるごとに、文学的伴侶として惹かれ合い、また、その翻訳や作歌において常に芥川を意識していたことが、書簡や短歌から認められた。このことは、片山廣子の第一歌集『翡翠』（大正五年）においても言える。芥川は『翡翠』の歌集評を第四次「新思潮」に寄せて、廣子の浪漫的な〈曼殊沙華肩にかつぎて白狐たち黄なる夕日にささめきをどる〉の歌を「其過去を代表するもの」とし、写実的な〈日の光る木の間にやすむ小雀ら木の葉うごけば尾を振りてみぬ〉等の歌を優れていると評価して、廣子の歌の進むべき方向を示す。芥川の指摘どおりに、廣子の第一歌集『野に住みて』（昭和二十九年）の歌は、写実や象徴性を含んだ平明な生活詠に変化してゆく。

「芥川龍之介の最後の恋人」「越びと」と呼ばれたことは、片山廣子にとっては矜持であり激しい悔恨でもあった。芥川や早世した息子や、今は亡き大切な人々のために、また、文化に渴望した戦後の時代の人々のために翻訳を再開し、軽やかで深みのある新境地の歌を詠む。そして、歌集『野に住みて』と随筆集『燈火節』を最晩年に世に出し、『燈火節』は昭和三十年に第三回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞している。

本論文は、これまで十分に検証をされてこなかった、短歌史に於ける片山廣子短歌の位置付けを考察し、「われ」を詠む片山廣子短歌の独自性の究明を目的として、廣子短歌の全貌を把握しようとしたものである。近代的な自我を持ち、アイルランド文学翻訳家「松村みね子」として活躍し、時代と境遇に翻弄されながらも短歌を詠み続けた。新派の発声から戦後短歌に至る歌壇の潮流の中で、写生詠や口語自由律短歌等も自在に取り入れながら、一貫して深い精神性を湛えた「われ」を詠む短歌の独自性を確立し、更に時を重ねて、「われ」の歌の厚みを増していったことが確認できた。